

否定の yes-no 疑問文で表される話し手の態度

松 尾 文 子

1. はじめに

関連性理論 (Relevance Theory) によると、疑問文は誰かにとって関連性を有する答であると話し手が見なしているものを表示するために、解釈的に用いられる (Sperber & Wilson 1986, 1995; Wilson & Sperber 1998; Wilson 2000: 151)。

Yes-no 疑問文の場合、聞き手が抱く最も自然な想定、すなわち、関連性を考えるに当たって好まれる想定は、話し手はその命題が真ならば関連性を有すると見なしているであろう命題を解釈的に表現していることになる。Wilson & Sperber (1998: 274) では、肯定の疑問文では否定の答 (命題) より肯定の答 (命題) の方が、否定の疑問文では肯定の答 (命題) より否定の答 (命題) の方が、どちらかと言えば関連性を有するとする。

本論では、否定の yes-no 疑問文の場合、必ずしも否定の答の方がどちらかと言えば関連性を有するとは限らないことを論じる。さらに、否定の yes-no 疑問文は、関連性を有すると話し手が見なしているものを表示する機能よりむしろ、その表示 (命題) に対する話し手の態度を表明するエコー機能の方が重要であることを論じる。

2. 関連性理論における疑問文

コミュニケーションにおける話し手の目的は、聞き手の認知環境 (ある人が持っているさまざまな想定 (assumption) の集合) を修正することである。人間は無意識のうちに、関連性を最大にしようとする傾向、すなわち、自分にとって関連性があると思われる情報に注意を払う傾向がある。人間の認知システムは、そうなるように進化してきたのである。

関連性の原則は2つある。1つは認知原則で、発話解釈に限らず、人間の認知全般に当てはまる原則である。もう1つは伝達原則で、意図明示的 (ostensive) 伝達とは、伝達者が情報意図 (informative intention) (聞き手に対して想定集合Iを顕在的、もしくはより顕在的にすること) を持っていることを、聞き手と伝達者双方にとって顕在化するという伝達意図 (communicative intention) を持った伝達のことである。簡単に言うと、伝達者は自分が聞き手に何かを知らせようとする意図 (情報意図) を持っていることを聞き手に知らせようとするということ

ある (Wilson & Sperber 2002: 255)。

以下に、「関連性の原則」と「最適の関連性の見込み」を記す。

Principles of Relevance

Cognitive principle: Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。)

Communicative principle: Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (すべての意図明示的の伝達行為は、それ自身の最適の

関連性の見込みを伝達する。)

(Sperber & Wilson 1995: 260)

Presumption of optimal relevance

(a) The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it. (意図明示的の刺激は、受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。)

(b) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences. (意図明示的の刺激は、伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。)

(Sperber & Wilson 1995: 270)

関連性理論では、発話 (命題形式を持つ表示) はすべて基本的に話し手の思考の解釈 (話し手の思考を表示する) であるが、それ自体2通りに用いられるとする。1つは発話が現実の状況や出来事を表示する記述的用法 (descriptive use)、もう1つは発話が他人や過去の自分の発話・思考を解釈して表示する解釈的用法 (interpretive use) で、表示をさらに解釈的に表示したものである。

関連性理論では、疑問文をどのように分析しているのでしょうか。

(1) a. Is Jill coming to the party?

b. Jill is coming to the party.

c. The speaker is asking whether it is true that —.

d. The speaker is asking whether it is true that Jill is coming to the party.

(Sperber & Wilson 1995: 225)

(1a) が純粹な (情報を求める) 疑問文の場合、(1a) の命題形式 (1b) は、(1c) のような想定スキーマ (assumption schema) (話し手は that 以下が真であるかどうか尋ねている) に統合さ

れて、(1a) の表意 (explicature) である (1d) を生み出すことになる。Carston (2002) では、(1b) を基本表意 (base-level/lower-level explicature)、(1d) を高次表意 (higher-level explicature) と言う。「表意」とは、明示的に伝達された想定 (explicitly communicated assumption)、すなわち符号化されている論理形式を発展させたもので、発話によって表現された命題 (表出命題) である (Sperber & Wilson 1995: 225)。

(2) a. It will get cold. (Sperber & Wilson 1995: 178)

b. The dinner will get cold very soon. (Sperber & Wilson 1995: 180)

たとえば、(2a) は直示的表現が指し示す対象の同定などの語用論的プロセスを経て、(2b) のような表意を持つことになる。

(3) a. In there. (Blakemore 1992: 59)

b. The meeting is in room 307. (Blakemore 1992: 60)

また、(3a) は補完などの語用論的プロセスを経て、(3b) のような表意を持つことになる。

Sperber & Wilson (1995: 232) では、疑問文は望ましい表示 (desirable representation) の解釈であるとする。「望ましい」とは、「関連性を有する」(relevant である) ということである。疑問文は望ましい思考を表示しているが、疑問文を発話するとき、話し手はある思考 (情報) について話していて、その思考が誰かの視点からすると望ましいと話し手が考えている。^{1,2}

つまり、疑問文は誰かにとって関連性を有すると話し手が見なしている答 (考え) を表示したものである (Wilson 2000: 151)。情報を求める yes-no 疑問文は、可能な答や真である答ではなく、話し手にとって関連性のある答を表示していることになる (Wilson & Sperber 1998: 274)。

Yes-no 疑問文では、話し手がその命題が真ならば関連性を有すると見なしているであろう命題を「解釈的」に表現していると先に述べた。疑問文の場合、表示の対象となっている発話や考えに付随する態度とは、関連性のある答や考えを望ましい、かつまだ実現していないが実現しようと見なす態度である。

また Wilson & Sperber (1993) では、疑問文や命令文といった法標識は高次表意に関して、発話解釈の過程において聞き手が行う推論処理の仕方に制約を課す「手続き的制約」をコード化しているとする。

3. Yes-no 疑問文に関する従来からの分析

Lyons (1977: 765) は、否定の疑問文では、命題 P が真であるという話し手の以前からの信念

と、否定命題～P が真であるということを示すような現実の証拠との間にまさつ (conflict) が起こるとする。

太田 (1980) は、疑問文が肯定、否定いずれの答をより多く予想するかを片寄り (bias) といい、肯定の答をより多く予想する場合は肯定の片寄り (positive bias) を、否定の答をより多く予想する場合は否定の片寄り (negative bias) を持つという。肯定の疑問文は中立的、もしあるとすれば否定の片寄りを持ち、否定の疑問文は多くの場合、肯定の片寄りを持つとする。

Leech (1983: 168) は、否定の疑問文では2つの対立する期待 (two contrasting expectation) が表されるとする。

(4) *Didn't you buy any flowers?*

(Leech 1983: 168)

1つは取り消された期待 (cancelled expectation) で、「彼女は花を何本か買った」ということ、もう1つは現実の期待 (actual expectation) で、「彼女は花を買わなかった」ということである。

村田 (1984: 9-10) は、疑問文の含意に関して、肯定の疑問文は中立的、あるいは否定的含意を持つとし、否定の疑問文については次のように考える。

(5) *Didn't you go there?*

(村田 1984: 9)

(5) には、「そこへ行きませんでしたか」という否定的含意と、「そこへ行ったんじゃないんですか (行ったんだろう)」という肯定的含意があるが、一般的には「おそらく行ったんだろう」という含意が潜む。否定的含意、肯定的含意のいずれの解釈をするかは、文脈により決まる。村田・成田 (1996: 7) ではさらに、否定の疑問文は中立的ではありえず、肯定ないし否定の偏りを持つとする。

Quirk et al. (1985: 808-809) では、否定の疑問文は否定指向 (negative orientation) を持つとする。

(6) a. *Can't you drive straight?*

b. I'd have thought you'd be able to (drive straight),

c. but apparently you can't (drive straight).

(Quirk et al. 1985: 809)

(6a) の否定の疑問文では、話し手の肯定的な態度と否定的な態度が結びついている。肯定的な

態度とは、(6b) に示される old expectation (古い期待) で、否定的な態度とは (6c) に示される new expectation (新しい期待) である。話し手はもともと肯定の答を期待していたが、新たに提示された証拠から、答は否定だと考えていることになる。

Swan (1995: 355) は、否定の疑問文の解釈には yes の答を期待する肯定の信念の確認を求めると、no の答を期待する否定の信念の確認を求めるとの 2 種類あり、いずれの解釈をとるかは文脈で決まるとする。

Huddleston & Pullum (2002: 867) では、話し手が別の答よりある答の方を好む傾向があるような疑問文を biased question と呼び、肯定の疑問文を neutral question、否定の疑問文を biased question であるとする。さらに、否定の疑問文は通例 strongly biased であるとする (883)。

Heritage (2002) は、否定の疑問文は情報を求めるといふより、話し手の立場や視点を表す機能を持つとする。否定の疑問文は Bolinger (1957) が言うところの 'conduciveness' の機能を持ち、否定の疑問文を用いることによって、話し手は自分が期待する答を相手から引き出そうとする。話し手と聞き手双方が共有知識を持っているような事柄に関する場合は、話し手は yes の答を期待する。

実際に使われている否定の疑問文を分析すると、必ずしも情報を求めるのが主な機能ではないことがわかる。「まさつ」「対立する期待」「否定指向」「bias」といった概念だけでは、否定の疑問文の機能を捉えることはできない。

4. 基本表意レベル (命題内容) の否定の場合

基本表意レベルの否定、すなわち否定辞 not が命題内容を否定している場合は、(1c) の想定スキーマの that 節内に not が来ることになる。そして、関連性がある答は否定の答である。たとえば、彼女の態度や発言から「それが好きではない」ことがわかって (7a) を発話する場合、否定の命題形式 (7b) が関連性のある答である。

(7) a. *Doesn't she like it?*

b. *She doesn't like it.*

(Huddleston & Pullum 2002: 879)

ところで、発話によって表されるのは、現実の状況や出来事などの命題内容だけではない。話し手が顕在化したいと意図している想定 of 1 つに、ある特定の態度で何らかの思考を抱いているということがあがる。このように、話し手がある思考を抱いているということと、それと同時にその思考に対する話し手自身の態度を表明することによって関連性を達成するような発話を、「エコー発話」(echo utterance) という。

話し手の態度は、身振り、声の調子や表情によって示されることもあるし、聞き手に話し手の

態度を推測することを任せる場合もある。また、伝えたい態度が明示的に示されることもある。

(8) a. *Regrettably*, I have a lot of work to do.

b. I regret that I have a lot of work to do. (Blakemore 1992 : 62)

(8a) では、‘*regrettably*’ によって (8b) のような話し手の態度が表される。

エコー発話によって伝えられる態度は、賛成、不賛成、困惑、怒り、驚き、疑念、皮肉など、さまざまである。あるいは、いくつかの態度が組み合わされている場合もある。どんな態度が表されるか、例を見てみよう。

(9) Peter : That was a fantastic film. (Wilson 2000 : 146)

(10) Mary : a. [*happily*] Fantastic.

b. [*puzzled*] Fantastic?

c. [*scornfully*] Fantastic! (ibid.)

(9) に対して Mary が “Fantastic.” と答える場合、(10a) では話し手はエコーの対象となっている Peter の意見を是認している。(10b) では話し手は疑念を抱いていて、(10c) では嘲笑の気持を込めて Peter の意見を拒否している。

次例では、話し手の Mary のアイロニーが表明されている。

(11) Peter : Can I open the window?

Mary : Go ahead and let in some nice Arctic air.

(Wilson & Sperber 1998 : 269)

ここでは、Mary は Peter に窓を開けることを許可しているのではない。Peter が Mary に窓を開ける許しを求めようとすることは馬鹿げたことである、と Mary が考えていることが示されている。Mary は自分の発話の字義通り以下の (*less-than-literal* : 字義通りに解釈されない) 解釈をふざけて示すことで、窓を開けるという考えには賛成しておらず、馬鹿げたことだと思っていることを明らかにしている。このように、アイロニーはエコー的解釈の特別の例であると言える。

(10) (11) ではエコーの対象となる先行発話があるが、先行発話がなくてもエコー疑問文を用いることができる。

- (12) You're leaving? (東森・吉村 2002: 122)
 (13) The king of France is bald? We have no king. (ibid.)

ある人がドアまで歩いて行くのを見て (12) を発話した場合、ある人がドアまで歩いて行くのを見た視覚情報に対するエコーとなっていて、おそらく、話し手の驚きなどが表され得る。また、フランス人がフランス国旗のそばにハゲの王様が座っているのを描いた絵を見て (13) を発話した場合、絵による視覚情報にエコーしていて、おそらく、強い疑念などが表され得る。

否定の答が関連性を有する場合、純粹に情報を求める以外に、このようなエコー疑問文として否定疑問文が用いられることが多いように思われる。それも、先行発話はなく、発話が用いられる状況にエコーすることが多い。そしてエコー疑問文として用いられることによって、話し手の態度が表明される。

次例は、妹 (I) が姉 (she) を車で姉の自宅まで送って来た場面である。発話者は姉で、車の中でしていた話の続きがあるので、当然妹は車を降りて姉の家に入って話を続けるだろうと思っていた。しかし現実には「妹が車を降りる様子がない」という状況にエコーして次のように発話する。

- (14) She opened her door and looked surprised when I made no move to get out of the car.
 "Aren't you coming in?"

(P. Cornwell, *The Body Farm*, p. 286)

ここでは、話し手の驚きや非難が表明されている。

次例は、私立探偵の Lomax のオフィスに、ある男が突然入って来た場面である。

- (15) Lomax: *Don't* you knock?
 Nordic: Where's your secretary?
 Lomax: Out. (The Firm [映画台本] p. 84)

ここでは、「ノックもせずに入ってきた」という状況にエコーして発話され、話し手の非難の態度が表明されている。

次例の Rusty は地方検事主席検事補、Raymond は彼の上司である。Raymond は検事の選挙戦を戦っているが、その最中に部下の検事である Carolyn が殺された。自分の選挙戦を有利に進めるために、投票日までに何が何でも犯人を挙げるように Rusty に命令する。アステリスクは、ネイティブが容認不可能であると判断したことを示す。

(16) Rusty : Mac's got more than she can handle already, Raymond. Let me remind you, we lost two key P. A. s (=prosecuting attorney) in one day. And all you got time for is the damned election. I've gotta run the office.

Raymond : Shit. Oh, for Christsake, I-Fuck the office! *Don't* (* Do) you understand what's happening here? If you don't find me a killer, there is no fucking office! Now, you listen to me. I want you right on top of Carolyn's case, *do* (* *don't*) you understand? (*Presumed Innocent* [映画台本] p. 20)

前半部の 'Don't you understand' では、話し手は部下の Rusty の無知を批判し、非難している。肯定の疑問文を用いると、ここで起こっていることを理解しているか否かの情報を求めていることになってしまう。Rusty の言葉から彼が現状を把握していないことがわかり、そのことにエコーしている。ちなみに、最後の 'do you understand' では、自分の支持を相手がわかったかどうかを確認しているので、否定形は用いられない。

もちろん、否定の疑問文が全てエコー的に用いられるわけではなく、否定命題の正当性を尋ねることもある。この場合、関連性のある答は否定の答である。

(17) a. *Don't* you feel well?

b. Am I right in thinking that you don't feel well?

(Swan 1995 : 355)

すなわち、(17a) が (17b) の意味を表すこともある。

Swan (1995) には、否定の信念の確認を求め、no の答を期待し、何かが起こらなかった、あるいは起こっていないことに対して話し手が驚いている例として次の 2 例があがっている。

(18) *Hasn't* the postman come yet? (ibid.)

(19) *Didn't* the alarm go off? I wonder what's wrong with it. (ibid.)

文脈が示されておらずこの発話だけではっきりしたことはわからないが、おそらく、(18) では郵便が届く予定になっていたが、ポストを開けると手紙が入っていなかったという状況で、(19) では目を覚ますと起床時間が過ぎていて、あわてているような状況で用いられるのではないだろうか。すなわち、発話が行われる状況にエコーしているということである。

5. 基本表意レベル（命題内容）の否定ではない場合

このタイプでは、関連性があるのは肯定の答で、否定の疑問文は話し手の態度を表すエコー機能を持ち、この機能が重要である。ネイティブによると、この場合、否定の疑問文を肯定形に変えることは不可能、あるいは非常に不自然であると言う。

次例のMitchは弁護士、Abbyはその妻である。

(20) Abby : You know, *isn't* (* *is*) it amazing? You did the cheating, and I'm the one who feels guilty.

Mitch : Don't.

(*The Firm* [映画台本] p. 142)

ここでは、話し手の怒りや皮肉が表されている。話し手は、浮気をしたのは夫なのに話し手が罪の意識を感じているのはおかしいとっていて、そのことに同意を求めているので、「～でしょう」という相手に確認を求める discourse marker の *you know* が用いられている。ここで肯定の疑問文を用いると、話し手は *amazing* か *amazing* でないかわからないので情報を求めていることになり、奇妙な発話になってしまう。

次例では、Mitch と Abby は Mitch が職を得た法律事務所からすばらしい家と車を提供されたが、それらには盗聴器が仕掛けられていた。それを見つけた Abby が家を飛び出し、彼女を Mitch が追いかける場面である。

(21) Mitch : Abby! Abby!

Abby : Shh! Don't say anything! Don't say anything! Don't tell me anymore! Everything, ... Every single we've said or done since we've been in that house ... nothing has been between us. *Can't* (* *Can*) we just get in our car and drive back to Boston tonight! We'll just leave everything. (ibid., p. 102)

ここでは、自分たちの車に乗ってBostonに帰ることができるか否かを聞いているのではない。ぜひそうすべきだと、自分の意見を強く主張している。感嘆符が用いられていることにも注意されたい。

Swan (1995) では、肯定の信念の確認を求め、yesの答を期待する場合、否定の疑問文が感嘆文や修辞疑問文としてしばしば用いられるとする。

(22) *Isn't* it a lovely day!

(Swan 1995 : 355)

(23) 'She's growing up to be a lovely person.' 'Yes, *isn't* she!'

(ibid.)

(24) a. *Isn't* the answer obvious?

b. Of course the answer is obvious.

(*ibid.*)

(24a) は修辞疑問文で (24b) の意味を表す。いずれも情報を求めるのが主な機能ではなく、むしろ、驚きや強い肯定の気持ちといった話し手の態度が表されている。

ちなみに、関連性理論でも、修辞疑問文の場合、話し手は答を知っていて情報を求めてはおらず、その答は聞き手にとって関連性があるものであるとする。例を見てみよう。Peter は禁煙すると新年の誓いを立てる。ところが、それを破って Peter が元日にタバコを吸う様子を見た Mary が次のように発話する。

(25) What was your New Year's resolution?

(Wilson & Sperber 1998 : 271)

ここでは Mary は Peter の誓いを知っていて聞いているのであって、情報を求めているのではない。

英語で否定の疑問文という形式が話し手の態度を表すのと同様の現象が、日本語でも見られる。仁田 (1991) によると、「ジャナイカ」形と呼ばれる形式は、文形式と裏面の意味との結びつきがほぼ一定していて、問いかけの文から述べ伝える文へと大きく踏み出している反語表現であるとしている。

6. 肯定形・否定形共に可能な場合

次に、肯定の yes-no 疑問文、否定の yes-no 疑問文共に可能だとネイティブが答えた例を見る。

次例は場面は法廷。カトリック教会が経営する病院で、Deborah という女性が誤った麻酔処置のために植物人間になった事件にまつわる話である。医療ミスを隠そうとする教会が雇った弁護士が Concannon。教会にとっては不利な証言をしようとする Thompson に弁護士が尋問する場面である。

(26) Concannon : Good morning, doctor. Uh, Dr. Thompson, just so the jury knows, you never treated Deborah Ann Kaye. *Is (Isn't)* that correct?

Thompson : That is correct, I was engaged to render an opinion.

..... (略)

Concannon : How old are you, doctor?

Thompson : I'm seventy-four years old.

Concannon : Uh-huh. Do you still practice quite a lot of medicine?

Thompson : I'm um, on the staff of anesthesiol (ogist) ...

Concannon : Yes, yes, I've heard of that. But, you do testify quite a bit against other physicians? *Isn't (Is)* that correct? You are available for that, so long as you are paid to be there?

Thompson : Sir. Yes. When a thing is wrong, as in this case, I am available. I am available. I am seventy-four years old, I am not board certified.

(*The Verdict* [映画台本] p. 84-86)

前半部ではオリジナルでは肯定形が用いられており、Thompson が Deborah の治療をしたことがないという情報を陪審員に知らせるためにチェックしている。否定形を用いると、攻撃的なニュアンスを持つ。ここでは、尋問が始まったばかりで、弁護士もまだ冷静な心理状態であるので、オリジナルでは肯定形が用いられていると考えられる。それに対して、後半部では尋問が進み、弁護士は報酬さえもらえば、仲間である医師に不利な証言にも立つのかと、証人を詰問している。したがって、オリジナルでは否定形が用いられているし、ネイティブも肯定形でも可能だが、話し手のより攻撃的な態度を示すには、否定形が適切であるという判断を下している。

次例は、法律事務所の所員のNinaが弁護士のMitchに彼のクライアントのMr. Mulhollandからの請求書のことで連絡があったと告げる場面である。

(27) Nina : Mr. McDeere! Uhm, Mr. Mulholland's called twice about this bill again.

Mitch : Tell Mr. Mulholland to take his bill and ... No, wait a minute. Just ... *Isn't (Is)* he just up the street?

Nina : Yes. In the Cotton Exchange. (*The Firm* [映画台本] p. 108)

肯定形を用いると、話し手はクライアントのオフィスの場所に関して情報を持っていないことになるが、否定形を用いると、「オフィスは通りを少し行った所にある」と思っていて、そのことを確認していることになる。

7. おわりに

否定の yes-no 疑問文が純粋に情報を求めている場合は、発話の命題形式（基本表意）が発話行為表現である (1c) のような高次表現の想定スキーマに埋め込まれた形の表意が伝達される。驚きや非難といった話し手の態度が表されるのは、否定の yes-no 疑問文が発話状況にエコーし

たエコー疑問文として用いられる場合に多いようである。

(20) (21) のような場合は、(1c) のような高次表現の想定スキーマに埋め込まれた形の表意よりむしろ、表出命題に対する話し手の態度を表す高次表意が伝達されている。(20) (21) では情報を求めるのではなく、怒り、皮肉、非難、強い主張といった話し手の態度を表明することが、情報処理労力に見合うだけの認知効果、すなわち文脈効果を生み出すのである。否定の yes-no 疑問文は、このようなエコー機能を持っていて、しかもこの機能が重要なのである。

注

- 1 「誰にとって望ましいか」、すなわち、答が関連性を有するのは誰かによって、疑問文の種類がいくつか考えられる。通常の質問では、答は話し手にとって関連性を有する。しかし、試験問題では出題者は答を知っているので情報を求めているわけではなく、受験者がどう答えるのかを知りたい。修辭疑問文では、話し手が聞き手にとって関連性があると見なしている情報を検索するように促し、答は聞き手にとって関連性がある。この場合も、話し手は情報を求めているのではない。詳細は、Sperber & Wilson (1995: 251-253)、Wilson & Sperber (1998:271-273)、Blakemore (1992: 114-116) を参照されたい。
- 2 同じ発話でも、文脈想定 (contextual assumptions) によって、疑問文のタイプが異なる。

Mary: Where did I leave my key?

Peter: In the kitchen drawer.

Mary が自分の問に対する答が自分自身にとって関連性があると見なしていることが顕在的で (manifestly)、Peter がその答を教えることも顕在的であるなら、この疑問文は情報を求める機能を持つ。

一方、Mary がその答が自分自身にとって関連性があると見なしていることは顕在的であるが、Peter に答を求めているのなら、この疑問文は自問自答の疑問文になる (Wilson & Sperber 1998: 275)。

参考文献

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Bolinger, D. 1957. *Interrogative Structures of American English*. Alabama: University of Alabama Press.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Heritage, J. 2002. "The limits of questioning: negative interrogatives and hostile question content." *Journal of Pragmatics* 34, 1427-1446.
- Huddleston, R. and G. K. Pllum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 東森勲・吉村あき子. 2002. 『関連性理論の新展開』「英語学モノグラフシリーズ 21」東京: 研究社出版.
- 今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』東京: 大修館書店.
- 草薙裕・南不二男・中野洋・吉田夏彦. 1985. 『文法の意味II』「朝倉日本語新講座 4」東京: 朝倉書店.

- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. Harlow : Longman.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 村田勇三郎. 1984. 『文 (I)』「講座・学校文法の基礎第7巻」東京：研究社出版.
- 村田勇三郎・成田圭一. 1996. 『英語の文法』「テイクオフ英語学シリーズ 第2巻」東京：大修館書店.
- 仁田義雄. 1991. 『日本語のモダリティと人称』春日部：ひつじ書房.
- 太田朗. 1980. 『否定の意味：意味論序説』東京：大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage* (2nd Edition) Oxford : Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986, 1995. *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell
(内田聖二他 (訳) 『関連性理論—伝達と認知—』東京：研究社出版, 1993, 1999).
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1998. "Mood and the Analysis of Non-declarative sentences." In A. Kasher ed., *Pragmatics : Critical concepts*. Vol. II. 262-289. London : Routledge.
- Wilson, D. 2000. "Metarepresentation in Linguistic Communication," In D. Sperber ed., *Metarepresentations*. 127-161. Oxford : Oxford University Press.
- Wilson, D. and D. Sperber. 2002. "Relevance Theory," *UCL Working Paper of Linguistics* 14, 249-287.

引用作品

- The Body Farm*. P. Cornwell (Warner Books : 1994)
- Presumed Innocent*. F. Pierson & A. J. Pakula (*Screenplay*. FOUR-IN Creative Products Group : 1994)
- The Verdict*. D. Mamet (*Screenplay*. FOUR-IN Creative Products Group : 1995)
- The Firm*. D. Rabe, R. Towne & D. Rayfiel (*Screenplay*. FOUR-IN Creative Products Group : 1997)